田舎に雅言の残れること

本居宣長

すべて田舎には、いにしへの言の残れること多し。ことに遠き国人の言ふ言の中には、おもしろきことどもぞまじれる。おのれ年ごろ心をつけて、遠き国人のとぶらひ来たるには、必ずその国の言葉を問ひ聞きもし、その人の言ふ言をも、心とどめて聞きもするを、なほ国々の言葉どもをあまねく聞き集めなば、いかにおもしろきこと多からん。

近きころ、肥後の国人の来たるが、言ふことを聞けば、世に「見える」「聞こえる」などいふ類ひを、「見ゆる」「聞こゆる」などぞ言ふなる。こは今の世には絶えて聞こえぬ、雅びたる言葉遣ひなるを、「その国にては、なべてかく言ふにや。」と問ひければ、「ひたぶるの賤、山がつはみな、『見ゆる』『聞こゆる』『さゆる』『たゆる』などやうに言ふを、少し言葉をもつくろふほどの者は、多くは『見える』『聞こえる』とやうに言ふなり。」とぞ語りける。そはなかなか今の世の卑しき言ひざまなるを、なべて国々の人の言ふから、そをよきことと心得たるなめり。

いづれの国にても、賤、山がつの言ふ言は、よこなまりながらも、多く昔の言を言ひ伝へたるを、人しげくにぎははしき里などは、異国人も入りまじり、都の人なども、ことに触れて来通ひなどするほどに、おのづからここかしこの言葉を聞きならひては、おのれも言選りして、なまさかしき今やうに移りやすくて、昔ざまに遠く、なかなかに卑しくなんなりもてゆくめる。

まことや、同じ肥後の国の、またの人の言へる、「かの国にて、『ひきがへる』といふものを、『たんがく』と言ふなるは、いにしへの『たにぐく』のよこなまりなるべし。この類ひのこと、国々になほ聞けることと多かるを、今はふと思ひ出でたることを言ふなり。なほ思ひ出でんままに、またも言ふべし。

（『玉勝間』）